

男性不妊治療における漢方治療の実際

横浜市立大学附属市民総合医療センター 生殖医療センター泌尿器科 部長・講師 湯村 寧 先生



1993年 横浜市立大学医学部 卒業
1995年 横浜市立大学医学部 泌尿器科学教室 入局
藤沢市民病院、横須賀共済病院、横浜市立市民病院などを経て
2008年 横浜市立大学附属市民総合医療センター 泌尿器・腎移植科 助教
2011年 同 講師
2012年 同 生殖医療センター泌尿器科 講師
2014年 同 生殖医療センター 部長

1871年に全国で2番目の洋式病院として設立した仮設の市民病院を出発点とする横浜市立大学附属市民総合医療センターは、地域医療の中核病院として長年、横浜市民に信頼され愛され続けている。同院では、診療の効率化を図り、より患者のための医療を提供する目的で高度救命救急センターを始め、いくつもの疾患別センターが設置されている。不妊治療もその一つであり、泌尿器科・腎移植科と婦人科が密に連携しながら、不妊治療を積極的に推進する「生殖医療センター」を開設している。

今回は、生殖医療センターの部長として、さらには男性不妊症治療のエキスパートとしてご活躍の湯村寧先生に、男性不妊症治療における漢方治療の実際と、その可能性について伺いました。

専門医が男性不妊患者さんの診療を担当

『生殖医療センター』は、不妊治療を行う診療科として2012年4月に新設されました。それ以前の当院における不妊治療は、男性不妊を泌尿器・腎移植科が、女性不妊を婦人科が担当していました。しかし、ご夫婦で受診される患者さんも多いため情報の共有が必要であり、両科の連携強化と治療の効率化を図ることを目的に当センターを開設しました。

たとえば、ご主人の電子カルテを開くと、一緒に治療されている奥さんのカルテも操作一つで開くことができるようになっているので、ご夫婦が当センターで治療を受けておられる場合は、それぞれの外来で同時に治療内容を確認できます。ご主人は当センターで、奥さんは他院で診療を受けている場合もあります。そのような場合は、奥さんが受けておられる診療内容を都度確認しながら、ご主人の診療を行います。

男性不妊は現在、私と竹島徹平先生、黒田晋之介先生の3名の専任医師が、平日の午前・午後に診療にあたっています。受診される患者さんは横浜市と近隣地区の方が大半ですが、男性不妊を専門とされる医療機関が全国的にも少ないことから、遠方から受診される患者さんもいらっしゃいます。患者数は12~13人/日ですが、新患者数は年々増加しています。

われわれは、県内の女性不妊クリニックで男性不妊の診療も行い、手術が必要な場合には当センターで手術を受けていただくというような連携システムも構築しており、患者さんに安心して治療を受けていただく体制を整えています。

不妊原因の約半分は男性側の要因

生殖可能年齢のカップルの6組に一組が不妊であり¹⁾、さらにその48%に男性因子が存在すると言われていています²⁾。

厚生労働省が実施した調査結果によると、男性不妊症患者さんの17.8%は無精子症であり、疾患別原因としては造精機能障害が82.4%でした。さらに、その内訳をみると、特異性が42.0%、精索静脈瘤が30.2%と多く、その他には停留精巣、抗がん剤治療後などがあります³⁾。しかし、わが国の不妊症治療は婦人科が中心であり、男性側に原因があっても男性不妊の専門医、男性不妊を専門に診療する医療機関が少ないのが実態です。

男性不妊の治療には、薬物療法と手術療法がありますが、無精子症に対して行う精巣内精子回収術(TESE)や、精索静脈瘤で手術が必要な場合などの手術適応を除き、薬物療法が主に行われています。

男性不妊患者さんに施行する薬物療法

男性不妊症治療の基本は、昔からビタミン剤と漢方薬とされてきましたので、私が男性不妊治療に携わるようになったころには、すでに漢方薬は当たり前のように使われており、私もその必要性を認識していました。ただ、当時使用されていた漢方薬の大半は補中益気湯でした。私は漢方専門医ではありませんが、漢方薬は患者さんの体格や体質を考慮して使

い分けるという基本的な考え方が根底にあるので、各々の患者さんに適した漢方薬を用いることで、より治療効果の向上が期待できると考えました。そこで、石川先生らの報告を参考に、現在は桂枝茯苓丸、柴胡加竜骨牡蛎湯、補中益気湯、牛車腎気丸の4処方を用いています⁴⁾。

現在、私が施行している男性不妊症患者さんの薬物療法を図に示します。まず、精索静脈瘤「あり」の場合は、桂枝茯苓丸とビタミンE、サプリメントのコエンザイムQ10を併用し、効果がない場合は手術療法に移行します。一方、精索静脈瘤「なし」の場合は漢方薬を軸に、患者さんの体質などをお聞きして、柴胡加竜骨牡蛎湯、補中益気湯、牛車腎気丸を使い分けています。実際には、“暑がりか寒がりか”、“睡眠や食事の状況はどうか”など患者さんの体質や生活状況をお聞きして、“元氣そう”なら柴胡加竜骨牡蛎湯、“少し弱そう”なら補中益気湯、“少し弱そう”でさらに“寒がり”なら牛車腎気丸というように、比較的簡単な鑑別で処方する漢方薬を選択しています。これらの漢方薬で効果不十分であれば他の薬剤に切り替えます。

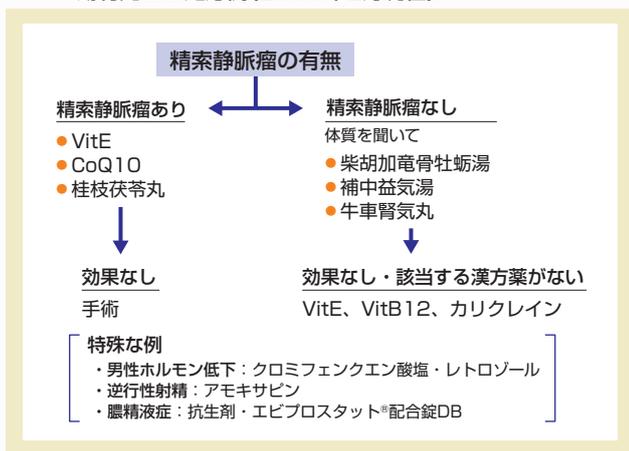
漢方薬の服用期間は3ヵ月を基本としていますが、ゆっくり改善してゆく場合もありますので、時間的な余裕のあるご夫婦には長期の治療も行っております。

不足している男性不妊専門医

日本生殖医学会では生殖医療専門医の認定制度を導入し、より専門性の高い人材の育成に取り組んでいますが、男性不妊を専門とされる医師の登録数はまだ全国でも50人弱です。しかし、これから専門医としての活躍を希望され、当センターでの研修を希望される若手医師も多くいらっしゃるので、われわれは日々の診療だけでなく、人材育成にも積極的に取り組んでいきたいと考えています。

また、当センターからの情報発信による患者さんへの啓発活動も必要だと考えています。冒頭にご紹介したように、不妊カップルの6組に一组は男性側の因子が影響しています。不妊で悩んでおられるご夫婦には、われわれ男性不妊専門医が介入することのメリットをお伝えしていく必要があると思っています。

図 男性不妊患者への内服治療
—湯村先生の処方例(2018年2月現在)—



男性不妊治療に使用できる漢方薬の 選択肢を広げたい

“結婚しない”、“結婚はするけれど子どもはほしくない”、など価値観は以前に比べ多様化しています。とはいえ、“子どもをほしい”と熱望されながら妊娠できずに困っている方々が非常に多くいらっしゃいます。われわれは、そのような方々にお子さんが授かるようにお手伝いをしたい、妊娠成立時の患者さんの喜ぶ顔を見たいと思いながら日々、診療にあたっています。

男性不妊の治療において、漢方薬は有用です。現在の選択肢は4処方と少ないですが、人参養栄湯、十全大補湯や八味地黄丸など男性不妊症に対して有効性が期待できる処方もあるので、漢方ご専門の先生や諸先輩のご意見、論文などを参考に、患者さんの体質等を考慮しながら処方できるように選択肢を広げたいと思います。それによって、患者さん個々に合ったオーダーメイドの治療ができるよう、さらに研鑽を積んでゆきたいと考えています。



生殖医療センター(男性不妊)を支える専任医師
左から、竹島徹平 先生、湯村 寧 先生、黒田晋之介 先生

【参考文献】

- 1) Louis JF, et al.: The prevalence of couple infertility in the United States from a male perspective: evidence from a nationally representative sample. *Andrology*; 1: 741-748, 2013
- 2) Comhaire FH.: Male infertility: clinical investigation, cause evaluation and treatment. Chapman & Hall Medical 123-131, 1996
- 3) 湯村 寧: 平成27年度厚生労働省子ども・子育て支援推進調査 我が国における男性不妊に対する検査・治療に関する調査研究, 2016
- 4) 石川博通 ほか: 男性不妊における選択的漢方療法. *泌尿器外科* 12: 241-245, 1999